

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

大嫌いで、大好きな私の母

美川中学校三年

金城 きんじょう

逢琉 あいる

母とは、どんな存在ですか。

頼もしい、優しい、楽しい、落ち着く、安心する、大好きなど柔らかい感情を持っている人はたくさんいると思います。しかし、面倒、邪魔、嫌いななど負の感情を持っている人も少なくないはずで。

昔の私だったら、母に向けていた感情でいうと、確実に後者の方です。それくらい母のことが嫌いでした。

私は小学校高学年から中学一年生の始めくらいまで反抗期だったそうです。今になって思い出してみたら、確かによく母に反抗し、その度に叱られていたような気がします。これがほぼ毎日だったので、叱られていた内容は全く覚えていません。右から左へと流して、もはや聞いてすらいませんでした。だから母の言葉は全然私に響いてきませんでした。その当時は母だけでなく、父も四つ下と八つ下の二人の弟の存在も鬱陶しかったです。四つ下の弟とは、どうでもいいようなことで、しょっちゅう喧嘩していました。でも母は別格で本当に嫌いでした。むしろ大嫌いでした。母がいなくなったら自分だけで何もできないくせに、居なくなればいいのと思っていたくらいです。嫌で嫌で仕方なかったです。

そんな私が十一歳のとき、八つ下の三歳の弟にある病気が発症しました。特発性血小板減少性紫斑病という血小板が減り、出血しやすくなる血液の病気です。子供は九割が半年で自然に治るものだそうです。これを聞いても正直私はどうでもよかったです。実際治る病気だったし、弟のことも好きではなかったのです。そんなに重く捉えていませんでした。弟の入院に付き添いで母が病院に泊まることになり、かわりに祖母が家に来てくれたことの方が私にとっては大きかったです。うれしかったことを覚えています。母と弟一人くらい家に居なくても、祖母がいてくれればそれでいいと思っていました。

ある日の学校終わりに、祖母と四つ下の弟と私でお見舞いに行きました。暗くなってきてそろそろ帰ろうとなったときです。母が突然泣き出しました。弱っている姿なんてみせたことがない口うるさい母が泣いて

いて私はその場で固まってしまふほど驚きました。当時は母が泣いたことにただ驚いて、なぜ泣いてしまったのかわかりませんでした。なのでこれは私の憶測ですが、母は怖かったのだと思います。私も四つ下の弟も大きい病気などかかったことがなく健康そのものでした。だからいきなり末の弟が病気になって心配だったのだと思います。治る病気だとわかっていてもやっぱり辛くて、母はずっと不安を一人で抱え込んでいたのだと思います。

私は足が地にベッタリと張り付いてしまったかのように動けず、泣く母と母を慰める祖母をずっと見ていました。心細くなっている母に寄り添うことも言葉もかけず、ただずっとみていただけです。気分が落ちついた母と別れて車に乗り帰路についていたときです。私は先ほどの母の様子を思い出して、胸が締め付けられるような泣きたい感覚に襲われました。「なんで声をかけなかったんだろう。」「どうして何もできなかったんだろう。」と後悔の想いが押し寄せてきました。それから一時期、あの時の母の様子が脳裏に焼きついて離れませんでした。

そのときから私の中でなにかが変わりました。弟が無事退院し、母が帰ってきてからも相変わらず反抗期は続きました。だけど、前より母の話を聞くようになったと思います。ずっと感じていた嫌いだという感情も、叱られたとき以外は誰にも感じなくなりました。徐々に弟との喧嘩も減って、反抗期も終わり、母に叱られることもほとんどなくなりました。今では母とくだらないことや趣味、学校での出来事を話したり愚痴を言い合うような友達同士の感覚で話すようになりました。

反抗期のときは、叱られてもうるさいとしか思っていなかったことも、今思えば私自身のために言ってくれたのだと気づくことができました。

どんなときでも、どんなことでも絶対に否定せず、受け入れてくれる母は、強くてかっこいい私の自慢の人です。

私が看護師になりたいことを一番に応援してくれている母の期待に応

えられるように、嫌なことにも負けず、何事も粘り強く取り組んでいきたいです。そして大人になったとき、母が喜ぶような親孝行をすることが目標です。

もし、今誰かに「母とは、どんな存在ですか。」と、問われたら少し恥ずかしいけど私はこう答えると思います。

「嫌いになるときもあるけど、大好きで大切な存在です。」と。

